

平成26年度の国際教養の取り組み

Initiatives in International Studies for SY2014

2014年度 国際教養委員会

西村 諭 水本 肇 橋本みゆき 堀内順治
成田慎之介 徳 初美 杉本紀子

要旨

本校独自の学習領域「国際教養」は、2012年度に1年～6年までのすべての学年がそろったこととなった。年度ごとの実践の積み重ねをもとに、開校以来改善や整備を加え、「理数探究」(1年)、「Pre Personal Project」(3年)、「Personal Project」(4年)、「国際5」(5年)、「ワークキャンプ」(1・3・5年)の開設・実施やフィールドワークなどはその運営が安定した方向に向かっている。一方で、6年生の「国際6」の開設の仕方や学習内容、SSHやSGHとの関わりの中での取り組みのあり方など、検討課題も新たに生じている。

今後は校内でのカリキュラム評価等の機会を通して、6年間の「国際教養」での学習形態・内容の精査や、21世紀型能力の獲得を意識した目標の体系化を図っていくことが課題である。

1. はじめに

本校における「国際教養」は「国際社会の中で共生・共存する力を育成する」ために設定された学習領域である。「国際教養」には「情報」(前期課程)や「LE (Learning in English)」(前期課程)、「第2外国語」(後期課程)・「GI (Global Issues)」(後期課程)など、教科に委ねられている科目もあるが、「人間理解(道徳)」(前期課程)や「Personal Project」など、学年や学校全体で運営する科目(時間)も含まれている。本校ではこれらの科目・時間が相互に結びつき、他の教科目とも関連しながら、生徒一人一人が豊かな教養や学力を身に着けることを目標にしている。

2014年度は、SSH指定校、SGHアソシエイト指定校、国際バカロレアDLDP候補校として認定を受け、それらにともなって、「国際教養」の位置付けや連携のあり方について再考をせまられることとなった。結果としては非常に難しい課題を抱えることとなったが、それらを含め本校の学びの中核をなす「国際教養」の6年間のつながりと継続をどのように構成するかが課題となった年である。以下、各学年での実践を報告し、それぞれの課題と成果を示しておくこととする。

(文責 西村)

2. 第1学年(8回生)の「国際教養」実践報告

8回生は、情報発信力・情報収集能力・グループワークによる協働コミュニケーション能力の育成を目的とし、ワークキャンプ、スクールフェスティバル、アートフィールドワーク、学年行事等を位置づけ、企画を行った。また、主体的な活動を伴ったプレゼンテーションとはどのようなものかを考え、調べたい場所に足を運び情報収集する中で、インタビューの大切さなどを学んだ。また、上級生によるCS活動の講演や各種団体の講演などを聞き、主体的に活動する取り組み方を学んだ。

(文責 水本)

3. 第2学年（7回生）の「国際教養」実践報告

7回生2年の国際教養では、「企画し、実際に運営するにはどのようなプロセスが必要か、またそれはどのように社会に貢献できるか」を学年年間テーマとして実践に取り組んだ。また、来年度3年生のプレ・パーソナル・プロジェクトでは、国内ワークキャンプに合わせて沖縄を大きな枠にした個人テーマ研究、再来年度4年生のパーソナル・プロジェクトでは、完全な個人テーマ研究を行うことを踏まえ、それらを見据えた活動も多く取り入れた。

1学期は、長くネパールの支援活動を現地で行っている「OKバジ氏」、Mother Houseの「早川理絵先生」など、実際に国際支援をされている方の活動を聞く講演を通して、自分達に何ができるのか、何をすべきなのかを考える機会とし、人の生き方を考えるきっかけとした。そして講演や様々な Community and service:CS 活動から考察、探求したことを、新聞スクラップやプレゼンテーションにて発表した。

2学期のスクールフェスティバルでは、学年テーマとして、IB国際バカロレアの目指す学習者像 AOI を意識した内容の課題を自ら決め探究し、それに基づきワークショップ（体験型講座）形式の発表を行うこととした。1年次では「国際理解」、「人間理解」、「理数探究」に関する発表グループを作成後、内容を決定し活動を開始したが、今年度2年次では、テーマと Unit Question「相手の心を動かすためには何が必要だろう？」に合致するワークショップの企画を考案し、実際に行える条件を満たした企画をワークショップとして開催した。スクールフェスティバル当日は、体感トレーニング体験・Cop Song 英語歌とコップ動作・車いす体験や手話学習・Free The Children 児童労働体験などの各ブースで、「自ら学び、それを他者に貢献する」というプロセスを実践した。

スクールフェスティバル後は、次年度の沖縄ワークキャンプを見据えた活動を多く取り入れた。「沖縄を知ろう～どうすれば効果的に知ってもらえるだろうか～」を Unit Question として、沖縄ワークキャンプやプレ・パーソナル・プロジェクトの土台となるような基本的知識を身につけること、より良い質問のあり方について考えること、チームで協力し合うことでコミュニケーションや仲間との関係を考えることを目的とした。クラスを6つのテーマ班に分けブレイン・ストーミングすることで、より多くの調査可能なテーマを発見すること、実際に Research Question として様々なテーマで考えてみることで、深みのある Research Question とは何であるかを追求すること、ランダムに配属された分野で活動することで、自分では選ばなかったかもしれないテーマと出会い、視野を広げることを目的として実施した。また、冬休み中に沖縄に関する本を数冊読み、3学期には自分の読んだ本の概要と書評を紹介する“知的書評合戦：ビブリオバトル”を行った。それぞれが読んで面白いと思った本を、原則レジュメやプレゼン資料の配布等はせず、できるだけライブ感をもって発表し、必ず5分間を使い切る、という条件のもと、その本の魅力をどのように伝えればよいか、何を伝えればいいのかなど、これまで学んできた力を発揮しようと全員がそれぞれ探求し実践しようとする姿勢が見られた。

上記学年独自の取り組みに加えて、1学期から夏休みにかけて、数学科との連携で「統計グラフコンクール」、進路指導部会との連携で、ジュニアインターンシップに取り組んだ。2学期には外国語科との連携のもと、世界の多くの学校で活動を繰り広げている英語劇を通して英語教育を行っている White Horse Theatre による英語劇鑑賞、国語科との連携で日本文化探訪として、銚子会館能楽研修所にて、能・狂言鑑賞とともに、狂言方の指導の下、全員で語りや声をそろえての謡（うたい）の練習を行い、日本の伝統文化に触れた。東京国立博物館では、常設展示とともに、

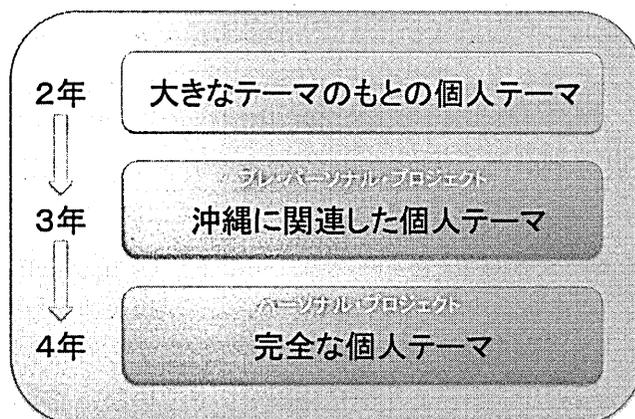
14年ぶりとなる「日本国宝展」を、TEPIA 先端技術館では、未来を拓く様々な先端技術を、Unit Question「現代を生きる私たちと日本文化はどのようにつながっているのだろうか?」、人間理解・理数探究、学年テーマと結びつけて見学・体験した。

学期	取り組み	国際教養の柱			MYPとの関わり				
		国際理解	人間理解	理数探究	学習の姿勢	多様な環境	健康と社会教育	コミュニティーと奉仕	人間の創造性
1 学期	国内ワークキャンプ(WC)概要								
	3回生 留学者講演								
	新聞スクラップ	○	○	○	○	○	○	○	○
	CS活動プレゼンテーション								
	講演「OKバジ氏」								
	講演「マザーハウス早川氏」								
夏 休 み	ジュニアインターンシップ	○	○		○		○	○	
	スクールフェスティバル準備	○	○	○	○	○	○	○	○
2 、 3 学 期	スクールフェスティバル発表	○	○	○	○	○	○	○	○
	日本文化探訪	○	○	○	○	○			○
	講演「FreeTheChildren」	○	○		○	○	○	○	○
	クラス企画	○	○	○	○		○	○	○
	CS活動プレゼンテーション	○	○	○	○	○	○	○	○
	国内WC事前学習	○	○	○	○	○	○	○	○
	PPPプレゼンテーション概要	○	○	○	○	○	○	○	○
	講演「感性工学: 椎塚氏」		○	○	○	○			○
	ビデオバトル	○	○	○	○	○	○	○	○
	PPPプロポーザル作成	○	○	○	○	○	○	○	○
国内WCテーマ別発表	○	○	○	○	○	○	○	○	

図 年間を通じた国際教養での取り組みとMYPとの関わり

4. 第3学年（6回生）の「国際教養」実践報告

6回生3年の国際教養では、沖縄ワークキャンプでのテーマを「東京発、沖縄の未来へ」、Unit Questionを「今、沖縄に向けて自分(達)ができることは?」と「よいコミュニケーションとは?」として学年の実践に取り組んだ。学年のテーマを設定した理由は、4年のパーソナル・プロジェクトでは、完全に個人テーマになり、3年の国際教養ではワークキャンプに合わせて沖縄という大きな枠はあるものの、プレ・パーソナル・プロジェクト(以下PPPと表記)という位置づけから、個人テーマが中心となるなか、学年全体としての一体感と、“発信”す



図「パーソナル・プロジェクトまでの個人研究の流れ

ることを意識づけるためであった。

国際教養の3本柱である人間理解、国際理解、理数探究については、個人研究のテーマ確定後、それぞれのテーマの共通項や関連をもとに、再編成を行った。結果的に

○人間理解分野 伝統文化、方言食文化、長寿・健康

○国際理解分野 戦争・基地、観光・産業

○理数探究分野 環境、サンゴ・海、動物、マングローブ、観光・産業

というサブテーマのもとグループ分けが行われた。なお、観光・産業は結果的に二つの分野にまたがる内容が扱われていた。

1 学期の活動

PPP のためのプロポーザルの作成と、生徒同士によるプロポーザルの相互評価を通して、プロポーザルの質の向上に努めた。その後、決定したプロポーザルをもとに情報収集を行い、さらに、より深い情報を得るためのインタビュー先の候補の検討を行った。実際のワークキャンプで訪問する前に、手紙による問い合わせを実施するための手紙の書き方、必要な情報を引き出すための質問の書き方について学習し、実際に手紙を送付した。

2 学期の活動

2 学期の活動は、ワークキャンプ前、ワークキャンプ中、ワークキャンプ後の3部に分けることができる。ワークキャンプ前は、手紙の返事をもとに、訪問先の再検討、「東京発、沖縄の未来へ」というテーマと照らし合わせたときの整合性について、個人およびグループで評価をしあい、ワークキャンプに備えた。また、この間インタビューの仕方についての講演を、本校社会科の中村教諭に依頼し、ワークキャンプでよりよいインタビューができるようにした。

ワークキャンプでは、結果的に合計 60 ヶ所以上の訪問先でそれぞれのテーマに即したインタビューを実施し、自分たちの提言についての評価、あるいは提言のための情報収集を実施した。

ワークキャンプ後は、情報の整理を行うとともに、PPP のための報告書、作品の完成に努めた。

3 学期の活動

2 学期後半に行っていた PPP のための報告書、作品完成と同時進行で、提言書「東京発、沖縄の未来へ」の執筆を行った。結果的に 292 ページの提言書を作成し、お世話になった諸機関に送付した。

3 学期には、PPP の発表会を実施し、情報の共有を図るとともに、4 年生による PP の発表を視聴することにより、次年度への取り組みの意識を高めた。

反省事項

ここで記録にとどめておくべき反省事項がある。それは情報発信の難しさと言うことである。沖縄への提言書を送付した結果、送付先から何点か指摘されたことがある。その一つは、せっかくのインタビューが十分に生かし切れていないように見えるということである。せっかく時間を取っていただいたにも関わらず、提言書に十分反映できていないグループがあり、インタビュー先に不快な思いをさせてしまったことである。また、実際には起きなかったことではあるが、いただいた情報をもとに、いずれネット上に情報を流したいという生徒の記述があり、それは困る

という指摘を受けたことである。これは、提言書をまとめる際に、インタビュー先に十分な説明がなされなかったために起きたことであり、情報発信の難しさと、指導側の十分な配慮の必要性を認識させられることであった。

(文責 堀内)

5. 第4学年(4回生)の「国際教養」実践報告

本実践は2014年度の第4学年(第5回生)の「国際教養」の記録をまとめたものである。本校はIBのMYPを導入して8年目を迎えた。第4学年はMYPの最終学年にあたる。MYPの最終学年にはPersonal Project(略称PP)という活動が組み込まれており、このプロジェクトを終了することがMYPの集大成ともなる。今年度もこの活動を中心に4学年の国際教養の学習を展開した。

5.1 パーソナルプロジェクトについて

パーソナルプロジェクトは名称を見る限りこれまで行われてきた「課題研究」「個人研究」「卒業研究」と類似した取り組みであるような印象を与える。個々の生徒が課題を設定して取り組む活動であり、国内の既存の取り組みと非常に近い側面もあるが、IBの教育理念・MYPの理念が色濃く見える学習である。一般的にイメージする「個人研究」との違いは、そのためにガイドが用意されることにもみられる。パーソナルプロジェクトについては、IBが独自にガイドを発行しており、目的・指針・評価項目・評価方法がIBによって定められている。本校ではそれらを参考にしながら独自のガイドを作成し、生徒に配布している。また、プロジェクトについての振り返り(取り組み後だけでなく取り組みの最中の振り返りも含む)が非常に重視されているのもMYPの特徴である。

さて、PPの特徴はまず、相互作用のエリア(AOI)¹に焦点を当てよと強調しているということである。AOIとは、「学習の姿勢」「多様な環境」「健康と社会教育」「コミュニティと奉仕」「人間の創造性」の5つの領域を指し、MYPにおける学習(教科学習を含む)は、この5領域を通して、相互に関連・影響しながら生徒の力を育むことが目指されている。このAOIの一つ以上に焦点を当てるには、自分の課題意識と別の何か(社会問題・現象など)との関係性を考えたうえで、それらがその領域とどう関連するかを自分なりに見出さなければならない。これは、プロジェクトとして不適切なものに「特定の教科と密接に関わりすぎているもの」が挙げられていることにも見て取れよう。すなわちPPは単独の教科の試験問題や演習問題を解くようなレベルのものであってはならず、それが別の対象(課題・社会・世界)とどう結びついているかが見えるものでなければならないのである。

また、PPは学習者の独自性と強い意欲を求めている。「本当にやりたいこと」でなければならない、「オリジナル」のものでなくてはならないという条件は、実は高校1年生(本校4年生)段階の生徒にとっては設定が難しい。単純に好きなことややりたいことはあるだろうが、それが「オリジナル」であるかどうかというのは、ネット社会であらゆる情報が氾濫する現代においては判

¹ ただし、2015年度よりNext Chapterへの変更に伴い、AOIが廃止され、それにあたるものとしてGlobal Contextsが設定された。

断が難しい。また、自分がやりたいことや好きなことが他の対象や分野、社会や世界とどのようにつながっているかを見出し、明確なゴールを設定しなければならないわけであるから、真剣に取り組むにはそれなりの覚悟が必要である。「学校の授業だから仕方ない」というレベルの意欲ではプロジェクトを修了することはできないということである。

5. 2 5回生のテーマと実践

では、5回生はどのようなテーマを設定し、プロジェクトに取り組んだのか。ここでは5回生のプロジェクトのうち、2014年度末に「Personal Project 賞」(PP 賞)を受けた生徒を含め、いくつかのプロジェクト名を紹介しておきたい。

下斗米 志織	「現在の日本に必要な紫外線対策とは？」(PP 賞)
富木 柚葉	「図書館をより多くの人にりようしてもらうためには？」
徳弘 賢人	「教育におけるプログラミング」
吉田 杏子	「「さいえんすごろく」の商品開発」
谷口 真一	「授業用配布資料の最適モデル化」
山本 真夢	「教室における座席配置と発言の関係性」
山口 愛生	「日本と台湾の交流のためにできること」

(文責 成田)

6. 第5学年(4回生)の「国際教養」実践報告

6. 1 「国際5」について

第5学年は、MYP 修了後の学年となる。そのため本校でも文部科学省の教育課程上の「総合的学習の時間」を「国際5」という名称で開設している。ただし、「国際5」は六年一貫の流れを鑑みて設置されたものであり、特に4年次のパーソナルプロジェクトや5年次に行われる海外ワークキャンプとの関係、あるいはその後の6年次の国際教養のあり方との関係性を強く意識しながら運営する必要があった。以下に、開設時のねらいと指針を挙げておきたい。

開設時の指針

(1) 国際教養に関する確認事項

【国際教養の目標】

- ① 第5学年終了時に英語を用いて多様な人々と議論(ディスカッション)できる力を育成する。
- ② 人間理解・国際理解・理数探究の領域から現代的な学習課題にアプローチし、探究する力・論理的に思考する力・プレゼンテーション活動を中心として表現する力を育成する。
- ③ 国際教養の学習で獲得した力を、将来的に様々な場面で発展的に活用していくことができる態度と行動力を育成する。

(2) 第5学年「国際5」の本校教育課程上の位置づけ

高等学校学習指導要領に示されている「総合的な学習の時間」を第5学年「国際5」として開設する(ちなみに4年次のパーソナルプロジェクトも総合的学習の時間の扱いであり、校内では

「国際4」として開設されている)。また「国際5」は1単位とする。

(3) 学習内容

- ・生徒一人一人が、第4学年までの学習やパーソナルプロジェクトでの成果等を踏まえ、進路を意識しながら、興味関心のある学習領域群(人間理解・国際理解・理数探究)の講座を選択し、その中で自己の課題を設定する。
- ・各講座において議論することを通して論理的思考に基づく発信力を高めていくとともに、客観的に自己の課題を見直し、問題意識を深めていく。
- ・課題研究の学びの成果を積極的に外部に発信する(スクールフェスティバル、外部のコンテストなど)。
- ・各学習領域群において、学習領域討論会、中間報告会等の活動を位置づける。
- ・年度末には校内にて国際5発表会を実施する。

(4) 支援体制

- ①学習領域群(人間理解・国際理解・理数探究)のバランスを踏まえ、専門的な指導を展開できる担当教員を配置する。・・・4年PPのSVとは異なる
- ②生徒は3つの学習領域群のいずれかを選択する。それぞれの学習領域群で担当教員が設定したいずれかの講座に属し、担当教員の指導・助言に基づいて自分の課題学習テーマを設定し、1年間継続的に研究に取り組む。
- ③外国語での議論(ディスカッション)及び研究のまとめが進められるように外国語科の教員が指導に加わる体制を整える。

(5) 開設の仕方

- ・それぞれの講座で議論できるような大テーマを設定する。その大テーマに関わる小テーマを各自が設定し、学年末に探究活動のまとめをする。
- ・5年学年担任6名を含める。(海外フィールドワーク事前・事後の指導に「国際5」の時間を当てられるようにするため。)

実際の講座

前掲のような指針のもとに開始された「国際5」であったが、実際にはなかなか「討論」をその活動に盛り込むことが難しい講座もあったようである。また、海外ワークキャンプを念頭においての英語によるディスカッションの訓練を行うには、教員・生徒双方の準備や意識不足もあり、一部の講座でしか行えなかった。しかし、教員・生徒共に手探りではあるが、それぞれの講座で課題を設定しては討論や作品制作を行うという活動を繰り返した。こうして生徒たちは1年間をかけて他者と課題を共有しながら個人の問題意識を持ち続け、小さな課題の解決を基礎として大きな課題の解決や作品完成に向けて学習活動を継続した。以下に2014年度の開設講座を挙げておく。なお、担当者は2014年度段階で本校に在籍していた教諭である。また、「領域」とは本校が独自に設けている教育の指針としての三つの領域「国際理解」「人間理解」「理数探究」を示す。

これらの講座での学習成果は2015年3月の活動報告会において、2015年度履修予定の4年生と参会者に向けて発表した。5年生全員の生徒が「国際5」の発表を行ったが、いずれも丁寧に自分たちの研究成果・研究過程について発表を行い、多くの参会者から温かい評価を得た。

発表した生徒たちの中には、進路的には理系を選択していたが、自分自身の意志で、視野を幅広く持つことや学問領域相互の影響関係を鑑みて文系の「人間理解」や「国際理解」の講座を選

んでいる生徒もおり、こうした生徒の学習活動や姿勢を通して、生徒自身の中で MYP の時期からの「AOI」(前出)の意識や学際的意識が強まっていることを感じさせられた。

	担当者教科	講座名	領域
A	外国語	世界の教育事情～高校生の視点から教育問題を考えよう～	人間理解
B	技術家庭	放射線に負けない食生活	人間理解
C	数学	COOL JAPAN 2	人間理解・国際理解
D	外国語	哲学について学ぼう	人間理解
E	理科	身近なことを科学的に読み取ってみよう	理数探究
F	外国語	フィールドワーク入門	人間理解
G	理科	国際生物オリンピックに挑戦しよう!	理数探究
H	数学	農業問題について考えよう	国際理解・理数探究
I	数学	自ら問題を発見し、数学的に解決してみよう!	理数探究
J	理科	炭素文明論を考える	理数探究
K	社会	エスニック・ワールドを読み解く	国際理解・人間理解
L	国語	特許に出願!	人間理解・理数探究
M	社会	時事問題について議論しよう!	国際理解

図1 5年 2014年度「国際5」開設講座一覧

6.2 海外ワークキャンプ(カナダ)について

本校では、6年間を通じて合計3回の「ワークキャンプ」を実施している。このワークキャンプは「国際教養」の学習活動の一部と位置付けられている。5年次においては行き先を海外とすることが本校開設準備時から考えられ、現地校との交流を通して、「異文化の人々と英語でディスカッションできる」力を育成する機会・検証する機会としての意義がある。

2014年度は本校で4回目の海外ワークキャンプの実施ということもあり、引率者の半数が海外ワークキャンプ引率の経験があり、前年度までの課題や過去の経験を生かしながら準備を進めることができた。また、ワークキャンプの要である現地校でのプレゼンテーションとディスカッションについても、実施時期が11月ということもあり、双方の教員と生徒の意識・情報を十分に共有できたために、ほぼ事前に想定した通り行われ、英語で現地の生徒と課題を議論することができた。しかしながら、ディスカッションについては、小グループであったこともあり、英語のスタンダードクラスにいる生徒も英語による会話に参加することができていたが、そのグループを構成するメンバーの国籍などによる影響がその充実度に影響していた。

ワークキャンプ実施後の生徒向けアンケートでは非常に満足度が高く、95パーセント以上が高い満足度を示した。プログラムの中では特にホームステイが高評価であった。さらに、ワークキャンプ終了後に英語に対する興味や留学の意欲を高めた生徒が多く、中でも英語のスタンダードクラスにいる一般の生徒たちにその傾向が強く認められた。以下、2014年度の実施概要を示す。

〈2014年度 4回生海外ワークキャンプ 実施概要〉

- 1 実施期間：2014年11月9日（日）～11月15日（土）5泊7日（機内泊1泊）
- 2 実施場所：カナダブリティッシュコロンビア州バンクーバー市（Vancouver）
バーナビー市（Burnaby）・ラングレー市（Langley）
- 3 交流高校：Burnaby South Secondary School
Langley Christian School
Pacific Academy High School（IB校）
- 4 目的：国際中等教育学校で学んできたことをいかし、海外で発表や活用の機会を得るとともに、それを通じて現地の人々と交流する。また、海外での生活を体験することで異文化に対する理解を深めたり、世界に共通する問題について現地の人々とともに考えたりする機会を持つ。
- 5 旅程：
 - 11月9日（日） 18:15 JL-18 空路バンクーバーへ
10:05 バンクーバー空港着、入国手続き
11:00 空港出発・エリア別行動
16:45 エンパイア・ランドマークホテル到着
18:00 市内レストランにて夕食
エンパイア・ランドマークホテル泊
 - 11月10日（月） 07:00 ホテルにて朝食
09:00 ホテル出発・班別自由行動
14:30 カナダプレイス集合、集合写真
15:00 各交流校へ移動
17:00 各交流校にてウェルカムセレモニー、ホストファミリーと対面
生徒はホームステイ先泊
 - 11月11日（火） リメンバランスデー、ホームステイ先の予定に合わせて一日行動
生徒はホームステイ先泊
 - 11月12日（水） 生徒はホームステイ先から各交流校へ
バディと一緒に授業参加
生徒はホームステイ先泊
 - 11月13日（木） 生徒はホームステイ先から各交流校へ
プレゼンテーションとディスカッション
生徒はホームステイ先泊
 - 11月14日（金） 生徒はホームステイ先から各交流校へ、ホストファミリーとお別れ
08:00 各学校出発、空港へ移動
09:00 バンクーバー空港着、解散式
12:40 JL-17 空路成田へ（機内泊）
 - 11月15日（土） 16:30 成田空港着、通関手続き後解散
- 6 引率教員・教員宿泊先：
5学年担任6名・校長・4学年担任2名（次年度準備を兼任）
その他看護師（日本人）1名が滞在全期間に同行した。

1 泊目 エンパイア・ランドマークホテル (生徒・教員宿泊)

The Empire Landmark Hotel Vancouver

1400 Robson Street, Vancouver, British Columbia, Canada V6G 1B9

2 泊目以降 シェラトン・バンクーバー・ギルフォードホテル (教員宿泊・非常時宿泊用)

Sheraton Vancouver Guildford Hotel

15269 104th Avenue, Surrey, British Columbia, Canada V3R 1N5

(文責 西村)

7. 第6学年(3回生)の「国際教養」実践報告

7. 1 6学年時の「国際教養」について

第6学年において「国際教養群」に開設されている時間・科目は次の通りである。

- ・「国際6」(「総合的学習の時間」)
- ・「国際A」(2単位:学校設定教科「国際教養科」内、学校設定科目)
- ・「国際B」(1単位:学校設定教科「国際教養科」内、学校設定科目)

このうち、「国際A」「国際B」に関しては、科目内にいくつかの講座を設け、生徒が前年度の履修科目登録時に選択できるようにしている。それらの講座は、既存の教科の枠にとらわれず、包括的な学びを意識して開設することを条件としているが、担当する教員の研究分野・専門分野の特色がよく表れている部分もある。2014年度の開設講座は以下の通りである。

- ・「国際A」:講座「憲法と人権」
- ・「国際B」:講座「近代小説講読」「応用数学」「APチュートリアル」

履修者は多数ではないが、大学入試にこだわらず、幅広く学びたいという意識を持つ生徒が履修している場合が多い。開設講座に関しては年度ごとに各教科・教員に開設希望を募って決定しているため、年度によって変わる場合もあるが、2012年度から2014年度までは変更していない。

「国際6」は文部科学省の教育課程上の「総合的学習の時間」に相当する。2014年度の企画・運営に関しては、生徒の進路や将来の社会生活への展望を鑑みて学年担任が実質的運営にあたった。内容に関しては、年度当初に過去2年間を振り返り、3回生の現状を踏まえて学年担任で話し合い、昨年度と同様に最終的に「社会への提言」を作成するという目標を教員側で提示し、その提言を作り上げるプロセスを学習活動の主軸に据えた。

7. 2 実際の授業と活動

社会に向けてその問題の解決策を提言するという最終的な目標に向かい、社会問題となっている事象に目を向け、生徒たち自身の関心事項とリンクさせる作業から開始した。生徒が関心を持っている分野やその中での問題は広域にわたったが、第1段階としては彼らが関心を寄せる問題を一定の共通項でまとめてグループ化し、その中で最も重大な課題や解決すべき問題を話し合わせ、先行文献の研究をし、そこから読み取れる問題解決のための(小)課題を洗い出させることとした。

第2段階(最終段階)は個人で、再度解決すべき課題・問題を設定して、研究・考察を行い、「社会への提言」として日本語・英語の2カ国語を使用して文章にまとめた。途中、経過報告ということで学年内でプレゼンテーションを行った。

以下に、4月当初の段階で生徒に示した資料・情報を掲げる。

□ 6年次の国際教養の目標と学習内容

5年次の目標は・・・

- ・異なる文化・環境を持つ他者と英語でディスカッションすることができる。

6年次の目標

<5年次までの経験をもとに…と考えると>

- ・社会にとって意義ある問いを立て、それに対して何らかのアクションを起こすことができる。
(→パーソナルプロジェクト、探究的活動の経験がもとなる。)
- ・母語でも外国語(主として英語だが、第2外国語等も含む)でも、異なる文化、背景を持つ他者と自分たちの社会の「課題」について対話し、相互協力体制を築くことができる。
(→プレゼンテーション・ディスカッション他様々な場面でのコミュニケーションの経験がもとなる。)

6年次の学習内容

- 自分の進路を考えるに際し、様々な現実社会の事象・問題と関連づけて考える機会を持つ(企業訪問・社会人講話など)。
- より現実的な社会の諸問題・諸相に触れる(フィールドワーク・社会人講話・時事問題についての調査・討論など)。
- 校内・校外の人々との討論
- 国際6のまとめとしての小論文やアクションプランの作成
 - ・自分の興味関心のある分野や課題と社会との関わりを見つけ出す。
 - ・志望や進路をあらためて考える機会とする。
 - ・書いた文章を審査・査読される機会を持ち、「他者」に読まれることを意識する。
 - ・社会的な課題を設定し、自分たちにできることやこれからの社会で取り組まねばならないことを「提言」としてまとめ、政府・企業などに送る。

次に、4月当初の段階での問題設定の材料として生徒に記入させた調査用ワークシートを掲げる。

課題①

(1) 今、あなたが関心を持っている社会の問題・現象は何か。

その問題・現象に一

- ・関連する領域は? 国際理解 ・ 人間理解 ・ 理数探究
- ・関連する学問領域は?

- 1 人文科学(哲学・宗教学・教育学・心理学・社会福祉学・文学・人類学・考古学・歴史学・地理学・芸術学・言語学・言語)
- 2 社会科学(政治学・行政学・経営学(ビジネス・商学)・法学・経済学・社会学・地域研究)
- 3 自然科学(数学・コンピューター科学・システム科学・物理学・化学・生命科学・生物学・医学・看護学・薬学・歯学・地球科学・宇宙科学・天文学)
- 4 応用科学(図書館情報学・応用芸術・デザイン・軍学・軍事学・農学・工学・建築学・交通科学・家政学・メディア研究・ジャーナリズム)

(2) その問題・現象と自分(自分の生活)にはどのような関わりがあるか。

(3) その問題は、現在の社会・未来の社会にどのような影響を及ぼす可能性があるか。

これらの調査の結果を踏まえて、第1段階は次のようにグループを分けた。もちろん全ての生徒の個人的関心を網羅できていた訳ではないが、このグループの中で意見・考えを共有し、その分野の問題で解決すべき問題を問いの形で考えさせた。

グループ	テーマ	人数
A	医療・看護	8
B	心の問題	7
C	農業	3
D	食	7
E	政治	5
F1	経済	4
F2	経営	6
G	東京オリンピック	6
H1	法	4
H2	法	4
I	交通科学	6
J	科学技術の抱える問題・未来・宇宙	3
K	男女共同参画	2
L1	国際関係	3
L2	国際協力	6
M	領土問題、外交、紛争	4
N1	教育	6
N2	教育	6
O	言語	2
P1	メディア	5
P2	メディア	4
Q	コンピューター科学・システム科学	7
R	生物・自然・環境	7
S	震災	2
T	音楽・テレビ・映画・その他の芸術	6

また、生徒には以下のような指示をペーパーで配布し、記録は自分たちでとらせた。

課題②
 グループ名 ()

(1) 各自が課題①で挙げた関心のある社会問題とそれについて知っていること・そのことについての自分の疑問を同じグループの人と共有してください。ただし、複数の問題を挙げた人は、今回所属しているグループに関連する問題について発言すること。枠内にメンバーが挙げた問題・現象を記録しておいてください。

(2) 所属しているグループのテーマに関連する問題のうちで、社会にとって最優先とすべき、あるいは社会にとって価値ある課題を「問い」の形で提示しなさい。グループで一つ。補助的な問いをつけてもよい。できれば「なぜ」「どうして」「どのように」「どのような」といった表現を使うこと。YES/NO・有/無で答えるような問でない方がよい。枠内に文で書いてください(単語の羅列で表記しないこと)。日本語・英語を併記すること。

(3) 次回までにその「問い」に対する答えを見つけるための手段・方法・ヒント・材料となるものを各自で考え、集めてきてください。

上記のような活動を出発点として、「国際6」1年間の活動を以下のように構成した。原則的に週に1時間(1単位)であるが、模擬試験や学校行事の関係で開講できない週もある。その時間に関しては、試験終了後の特別時間割期間中に複数時間を設定するなどの工夫を行った。なお、3学期については、年間で必要な時間数を2学期までに前倒しして取り、提言書作成までの目標を達成することができたので、HRに振り替えた。

<1学期>

- 4月16日 進路ガイダンス
- 4月23日 国際6オリエンテーション・社会問題について考えるI (課題意識調査)
- 4月30日 海外 Vancouver Work Camp プレゼンテーション準備
- 5月7日 海外 Vancouver Work Camp プレゼンテーション準備
*プレゼンテーション自体は、6時間目のHRで実施
- 5月14日 社会問題について考えるI
- 5月21日 社会問題について考えるI
- 5月28日 社会問題について考えるI
- 6月4日 スクールフェスティバル準備
- 6月18日 社会問題について考えるI
- 6月25日 社会問題について考えるI (未来共創塾準備)
- 7月2日 進路ガイダンス
- 7月16日 未来共創塾

<2学期>

- 9月3日 社会問題I
- 9月17日 センター試験説明、「これからの国際6について」説明

9月24日	センター試験確認
10月1日	社会問題Ⅰ *第一段階まとめのディスカッション
10月8日	社会問題について考えるⅡ *ここから個人研究
10月15日	社会問題について考えるⅡ
10月22日	社会問題について考えるⅡ
10月29日	社会問題について考えるⅡ
11月5日	社会問題について考えるⅡ
11月19日	社会問題について考えるⅡ
11月26日	社会問題について考えるⅡ
12月3日	社会問題について考えるⅡ

(7月実施「未来共創塾」について:「三菱総合研究所」の연구원の方々を講師として、講義および質疑応答・ディスカッションをしていただくことを依頼した。講座の内容をなるべく生徒の関心の高いものにするために、第1段階のグループごとの関心リストを三菱総合研究所へ知らせ、三講座を用意して頂いた。なお、生徒の関心のある分野の多くが三菱総合研究所版の『Phronesis no.11 ジャパン・クオリティ』の内容と重なっていたため、生徒全員に1冊ずつ献本していただいた。そして準備のための時間中に先方への質問事項をリストアップして、事前送付し、講座の内容に反映していただいた。開設された講座は以下の通り。

*数字でみる日本 — 経済・経営/交通計画/国際協力 —

*高齢社会に向けた処方箋

*ジャパン・クオリティ — 放送コンテンツ —

(生徒の振り分けは、希望調査を行い、教員側で検討・決定した。)

本校ではこれまでに3回卒業生を送り出し、現在(2015年11月現在)の6年生(4回生)までずっと最終学年においても「国際6」で総合的・包括的な視野を持って活動するという姿勢が踏襲されている。1回生は「国際教養のまとめ」として授業内外での活動を含めた内容について発表をさせ、「社会への提言」作成は2回生から行っている。大学受験を控えた時期にこのような探究的活動を行うことについては賛否両論あるであろうが、卒業生の声を聞いてみると、卒業後の学生生活や社会生活を送る中で、国際教養における学びや経験が様々な場面で活かされているようだ。現在(2015年11月現在)、4回生の国際6においても、ほとんどの生徒が受験に備えて学習に勤しみながら、提言の作成や発表(プレゼンテーション)に取り組んでいる。

さて、4回生の活動に関して言えば、第1段階のグループでの先行文献の研究を行ったことにより、より明確なリサーチクエスチョンを立てることができた。以下はそのリストである。

<社会への提言：グループ版（1学期先行文献の研究分）の「問い」>

グループA：「脳死に対して、医療関係者がどうあるべきか？」

グループB：「いじめが少なくなる環境とは？」

グループC：「現在の農業をどのようにしたら改善できるか？どのようにして発展させていけばよいか？（放射能、土地、といった観点から）」

グループD：「日本の食料自給率を上げるための食生活は？」

グループE：「国民の政治的関心を上げるためには？～投票方法と教育の在り方から考える～」

グループF1：「日本の理想とする消費税率は何パーセントか？」

グループF2：「日本企業がそれぞれに見合った市場で成功するためにどのような戦略を立てていくべきか？」

グループG：「どのように日本国民が東京オリンピックに対して積極的になれるような宣伝をしていくべきか？」

グループH1：「技術の発展や社会の変化に応じて法は効果的に働いているか？」

グループH2：「日本の法のグレーゾーンを失くすには？」

グループI：「首都圏の交通の混雑を緩和するにはどうすればよいか？」

グループJ：「研究の不正をどう防止すればよいか？」

グループK：「男女互いの立場を尊重した社会をつくるためにどのような法律が立案できるか？（高校生なりの意見を内閣府男女共同参画局に提出したい）」

グループL1：「どのようにすれば日中韓関係の距離感を安全性を通して縮めることができるだろうか？～民間の意識を変える～」

グループL2：「途上国の発展を支援するためには～アフリカの発展を分析してみよう～」

グループM：「どうしたら「国」と「国」の関係はうまくいくのか？（日本を中心とした）：視点→法律（過去の戦争を踏まえた上で出来た平和条約などの歴史）、文化（戦争によって変えざるを得なくなった文化）、歴史（過去から見た未来）、外国（特に中国、韓国などの日本以外からみた見た日本）」

グループN1：「どのような教育が今の日本にとって理想か？」

グループN2：「理想の学校外教育とは？（教育とは、学校の中だけで行われるものではない。若者のこころとからだ両方に働きかけ、その人の能力を伸ばすことは学校外でも行われていることだ。特に近年では塾をはじめ、様々な習い事、教育ビジネスが生まれている。その中で、実際に様々な学校外教育を受けた私たちが、理想の学校外教育を探究していく。）」

グループO：「どうしたら多言語が共存できる社会を作れるか？」

グループP1：「マスコミはどうあるべきか？～発信者と受信者の理想的な関係～」

グループP2：「私達が本当に必要な情報とは何か？それを正しい形でメディアは伝えるのか？」

グループQ：「スマホ中絶による弊害とどう向き合っていけばよいか？」

グループR：「現在、日本のイルカ漁や捕鯨が国際社会で非難の対象となっている。文化、環境の面から見て、それは正しいことなのか？」

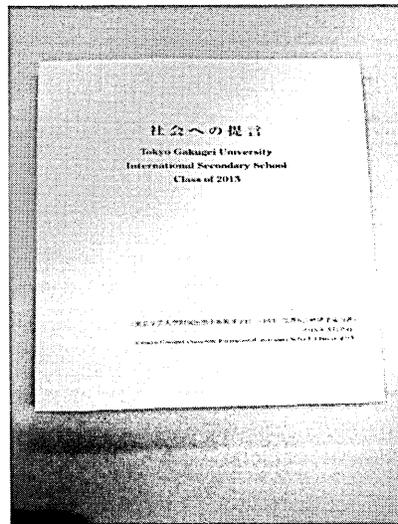
グループS：「どのように震災を乗り越えるために人が必要とする建造物をつくるのか？」

グループT：「これからの映像音楽表現/作品はどのような発展を遂げるべきか？」

第1段階ではグループで同じ分野に関心を持っている生徒が集まって活動をしたわけだが、それによって課題を多角的多面的に考え、精度を上げることができた。同じ分野であっても、個人によって具体的な観点が異なるので、小課題を見出すにあたり、包括的に問題について考察することができたので、個人の主観ではなく、社会に生きる人々全体の利益を考えて「解決すべき課

題」を「問い」の形にまとめることができたのではないだろうか。また、生徒たちの頑張りを後押しする新しい試みとして、三菱総合研究所及び本校の教員にリサーチクエスチョンリストを送付し、お勧めの参考文献を挙げてもらった。このことで、生徒たちはより視野を広げて文献の調査に取り組むことができたようだ。

では、第2段階の活動はどうであったか。まず活動体制についてだが、これは第1段階中に生徒の様子を観察しながら学年担任で考えた。その結果、活動に対するモチベーションや意識の差が異なっていることや、最終的には一人ひとりに「国際6」の活動のまとめをしてほしいという担任団の希望を込めて、個人活動に移行して提言書作成に取り組ませることにした。敢えて課したこの課題に対して、全員が一定の意義を感じていたと思われるが、それは全員が最終的な原稿を提出したということに表れているものと思われる。



(図1 第2段階提言書)

第2段階の活動では、全123の提言が作成された。そして限られた数の生徒に対してではあるが、本校が附属している東京学芸大学の教員から提言に対する助言を得ることができた。今後はさらに外部の専門家や専門機関から助言を賜り、生徒の探求的活動の質の向上につなげることができるのではないだろうか。提言の質や精度に関して言えば、多くの課題が積み残されているものの、第1段階の活動を経て、当初の漠然とした課題意識がより具体化したものが増えていくように感じられる。中にはこの「国際6」だけで今回の分野に関して研究活動に取り組んだのではなく、本校入学時あるいは下の学年に在籍していた時からの取り組みを生かして、充実した内容の提言を作成した者もいたのだが、このことは本人にとっても学校にとっても大きな財産になったのではないかと感じる。

以下にその提言の問いの一部を掲げておく。なお、「問い」に関しては全ての提言において日本語と英語の両方を併記するように指示をした。また、本文が日本語の場合は英語による要旨を、本文が英語である場合は日本語による要旨をつけるように指示をした。

<社会への提言：最終版の「問い」>

- ・「首都圏の交通の混雑を緩和するにはどうすればよいか」
～「車両開発」「運行管理」に焦点を当てて～
How do we ease the traffic jam in urban area?
- ・「チーム医療へユマニチュード導入を ～脳血管障害を例として、チーム医療を学ぶ～」
Introduce “Humanitude” into Team Medical Care ~ learn what Team Medical Care is from care
fore cerebral infraction patients ~
- ・「情報化社会で成功する人材を育成するには」
How to bring up the talented person who is helpful in an information-oriented society
- ・「オリンピックを持続可能な発展につなげるためには？」
How can we use Olympics to bring about sustainable development in Japan?
- ・「発展途上国を支援するためには ～ 現状分析と効果的支援を考える ～」
How should we aid the development of emerging states?
- ・「国際秩序を保つために ～ 日本はどのような捕鯨政策を実施すべきか ～」
What kind of whaling policy should Japan implement in order to maintain international order?
- ・「過去の財政をもとに現行の財政はどのように改善できるのか」
What can we learn from ancient tax system?
- ・「ストーカー規制法・対策はどうあるべきか？」
How should stalker laws/regulations and measures be?
- ・「日本の道徳教育に対する社会の関心を向上させるには」
How to dissolve the society’s indifference about the moral education in Japan
- ・「デジタル情報社会の中で映画はどのように発展するべきだろうか？」
How should cinema evolve in the digital age? ~ A look into the development of original online
content ~

結果としては、理数探求分野の提言の割合が一番低く、残念であったが、より自分の進路目標に沿った研究に取り組んだ生徒が多かったこともあり、内容的には充実している感はある。全体的には、年度当初の第1段階の開始時に比べると、より問題を身近で解決すべき問題であるという認識を持つようになり、一人ひとりが自分の掲げた課題に対する解決策を検討したようだ。この提言は前掲図1のように冊子として作成し、卒業生全員に配布するとともに、大学・関係団体及び協力していただいた方々に送付した。それには社会に向けて彼らの提言を実際に提示するという点で意義がある。提言の内容はすぐに解決策として使うことができるというレベルには至っていないが、近い将来社会に出て、問題の解決の一端を担うであろう彼らが、社会の問題を自分のこととして受け止めているのだということを示す一助になったのではないかと考える。

(文責 徳)

Abstract

This year, TGUISS was designated by the government as a Super Global High School. In applying for the designation, we started by reviewing our traditional objectives and revisiting the direction of task awareness among the students. Our initiative is still a work in progress. We must aim at systematic international studies focused on task-oriented research and the establishment of criteria for skill/capacity assessment through task-oriented research.